



異世界に転生したけど トラブル体质なので心配です 5

Q L P H Q L I G H T

小鳥遊渉
Takanashi Ryuumu



アルファライト文庫

登場人物紹介



あつた。

マルベリー公爵の街の南西にレイモンという町があり、特産のすっぱくて黄色いレイモ



ンという果物が有名だ。この町の規模はあまり大きくないため、騎士団はアットホームで
あつた。

1 カイル兄さん 勧誘

いつも面倒事に巻き込まれてばかりのトラブル体质な俺、アルフレッド。

最近は自分が住んでるメダリオン王国だけじゃなく、魔法大国アスラダやグラント帝国で

起きた問題まで解決するハメになつていて。

アスラダの軍隊を壊滅させるほど強い『岩風竜』を討伐したり、グラント帝国で発生した
流行り病から人々を救つたりと、あちこち忙しく飛びまわつていて。

本当は家族とまつたり過ごすのが夢なのに、なんでかいつもこうなつちやうんだよな。

アルフレッドの兄で十四歳のカイル・ハイルーンは見習い騎士として、朝から先輩騎士と領地を見まわる業務をしていた。先輩騎士と一緒に行動することで仕事を体で覚えるのだ。

カイルは体を鍛えるため、自主的に土を十キロほど袋に詰めて背負っている。

先輩騎士は軽装をしており、体の大きさも違うため、カイルは遅れまいと必死についていく。

一時間ほど経った時、一人の騎士がカイルに声をかけた。

「カイル・ハイルーン、お前に小さなお客が来ているぞ」

騎士が微笑む。

この二年の間、手紙すら届かなかつたので誰だろうと首を傾げるカイル。

「休憩してよし。土袋は置いていけよ」

一緒に見まわりをしていた騎士が笑いながら言つた。

「ありがとうございます。少し休憩させてもらいます」

カイルは背負っていた土袋をその場にドサッと下ろすと、通行の邪魔にならないように端に移動させた。

待つっていた騎士について歩いた先には、アルフレッドがいた。

アルフレッドは今まで見たこともない奇抜な格好をしているため、カイルは頭のてっぺんから足の先まで舐めるように見た。

ちなみにこれは風魔法で空を飛ぶためのウイングスースという服で、ムササビみたいな格好である。

「変わった格好をしており、お前の弟だと言つているが、間違いないか？」

騎士は不審者でも見るような視線をアルフレッドに向けながら言つた。

「アルフレッド・ハイルーン、弟で間違いないです！」と、カイル。

「そうか！ では三十分休憩してよし。しかし、今、王都ではこんな変わった格好が流行っているのか？ どこで売っているんだ？ 後で聞いて教えてくれ！」

「分かりました。聞いておきます。休憩のご配慮、ありがとうございます！」

カイルは先輩騎士にかこしまつて言つと、先輩騎士は怪しそうな視線をもう一度、アルフレッドに送つてから歩き去つた。

「アルフレッド、誰と一緒に来たんだ？ こんなに遠くまでよく来れたな？」

「カイル兄さん、久しぶりですね。ガルトレイン第三騎士団長からここにカイル兄さんがいると教えてもらつたので、王都の帰りに来たんですよ」

アルフレッドはニコニコしながら元気に言った。

カイルはアルフレッドの周辺を、何かを探すように見まわした。

「一人で来たのか？」

「はい」

「そうか、遠いところ会いに来てくれてありがとう。みんな元気にしてるか？」

カイルは家族のことが気になっていた。アルフレッドの顔を見れて安心し、嬉しそうに聞いた。

「ええ。お父様もお母様も、サーシャも元気ですよ。ところでカイル兄さんにお父様から手紙は届くのですか？」

「いや、この二年間で一度も届いてないぞ。本当にうちの親はどうなっているのかな？ 他の同期は最低でも半年に一度は手紙が届いているんだがな」

カイルはそう言いながら苦笑する。

「やっぱり！ それなら、この二年の間の出来事は何も知らないんですよね？」

カイルの顔は、一瞬で不安そうな表情に変わった。

「もしかして、また村をゴブリンが襲つたのか？ 誰も怪我していなければいいけど」

「あれから襲われてはいませんよ。襲われないようにゴブリン迷宮の討伐も定期的にやつ

てますからね」

アルフレッドが誇らしげに言うと、カイルの不安そうな表情が和らいだ。

「そうか！ じゃあ、グラン帝国が攻めてくるという噂を聞いていたんだが、その話か？ 誰かが撃退したらしいんだが、マルベリー公爵軍ではないみたいなんだ。アルフレッドは何か聞いていないか？」

「あれですか？ いろいろと……公にできないんですね」

アルフレッドは考えながら言葉を選ぶように言った。

「その言ひ方からすると知つていいんだな？ 誰にも言わないから内緒で教えてくれよ！」

カイルは身を乗り出すようにすると、興味津々な様子だ。

「どうしようかな……本当に誰にも言わない？ それならいいけど、絶対ですよ！」

アルフレッドは少し悩むそぶりをしていたが、小声で念を押す。

カイルは周りを見まわすと、アルフレッドの両手を握り、小声で言う。

「約束する、絶対に誰にも言わないから」

カイルはアルフレッドの目を見つめるように訴えかけており、必死さが窺える。

「うん……僕ですね」

アルフレッドは少しはにかみながら言つた。

「はあ!? アルフレッド、大丈夫か? お前、前に頭を強く打った後遺症が出たんだな……だからそんな変な服を……」

「やだなー、カイル兄さん。そんな目で見ないでよ! この服がそんなにおかしいですか? 僕はもう、大丈夫ですよ」

カイルはどこまでも明るいアルフレッドを心配そうに見ていたが、ハツと思い出したよう言う。

「ところでアルフレッド、お前、こんなに遠くまで何しに来たんだ!?」

「ほら、手紙届いてないでしょ。カイル兄さんの近況が分からず、お母様が心配していたんですよ……それと、カイル兄さんの就職先の斡旋がメインの用件ですね」

カイルは驚いていた。父親が村で辺境騎士を続ける間は騎士になろうにも枠がないため、カイルは就職先をどこにするべきか悩んでいたからだ。

「はあ!? 就職先の斡旋だつて!? どこへ? 誰が雇つてくれると言つてているんだ?」

カイルは興奮気味に、アルフレッドの腕を掴んだまま前後に揺さぶる。

「カイル兄さんはうちの村の騎士になりたかったんですね?」

「ああ、だけど、村の騎士の枠は一人だけだから、父上が引退するまで無理だろ?」

カイルの両手から力が抜け、少しがつかりしている。

「カイル兄さん? 今、村の騎士は五人なんですよ!」

「なんだと!? いつから。え? どうなつてているの?」

カイルの顔は、あんな小さな村に騎士が五人も必要ないだろと言いたげで、困惑している。

「今度、騎士と文官も増やす予定なのでカイル兄さんを勧誘しに来たんですよ。雇い主は

僕ですよ!」

「はあ!? お前が雇い主? 何言つてんだ!? やつぱり頭、大丈夫じゃないだろ!」

カイルは思つていたことが口から出て、しまつたという表情をしている。

「ですよね。簡単には信じられませんよね? カイル兄さん、申し遅れましたが自己紹介をしますよ」

アルフレッドが少し硬い表情で言つた。

「自己紹介って、今更、何言つてんだよ……かなり重症だな」

カイルは残念な人を見るような目をしており、最後はぼそりと呟くように言つた。

「陛下より伯爵に陞爵されたんです。以後、お見知りおきください。なんてね」

アルフレッドが真面目な表情を崩すと、ペロリと舌を出して引っ込んだ。

「……何!? え! え! えー! いつの間にそんなことになつていてるの!?」

カイルは飛び出すのではないかというほど大きく目を見開いて驚いている。

「去年、グラン帝国を撃退して男爵に叙爵されたんですが、いろいろあって今年、伯爵に陞爵されたんですよ」

「待つてくれ。伯爵に陞爵されたことは聞こえたが、夢のような話で頭が理解しようとしてくれない」

カイルは両手で頭を抱えており、困惑していた。

アルフレッドはカイルが落ち着くのを待つ。

「とにかく、カイル兄さんが卒業したら僕が雇うつてことでいいですか？ あ、給料は身内だからて蟲食ひしきとかはないですよ。あと、先の話になるんですけど、クロード兄さんも雇うことになります」

「クロードも？ アルフレッドが言っていることを信じていいのか？」

カイルは落ち着きを取り戻し、笑顔を見せるようになった。

「あの、カイル兄さん？ 村の名前なんですが覚えていてますか？」

「そこそこ成績はいいから期待していいぞ」

「はい。カイル兄さん、できれば騎士学校は優秀な成績で卒業してください。給料を少し上乗せできますよ」

「そこそこ成績はいいから期待していいぞ」

カイルが驚き、アルフレッドはニコニコと楽しそうだ。

「今はハイルーン村という名前に変更されており、近いうちに町になる予定ですね。人口も千人を超えていたはずですよ」

「え！ どういうこと？」

カイルが驚き、アルフレッドはそれを楽しんでいる。

「俺がいない二年の間でそんなことになつているの？ なのに状況を知らせる手紙が届かないのつて、そういういじめ的なやつ？ 帰つたら父上に聞かなきやな！」

「家も場所が変わつてるので間違えないでね。村に入つたら川沿そいに進んで橋を渡つたら、左に折れて川沿いを進むとハイルーン邸どですよ」

「川を渡る？ 村に橋なんてあつたつけ？ まったく想像できないんだけど！」

「またもや、カイルの顔は困惑気味だ。

アルフレッドは悪戯いたずらが成功したときのように上機嫌じょう きげんだ。

「村がかなり大きくなつてているので、楽しみに帰つてきてくださいね。あつ、そろそろ戻つ

た方がいいですか？」

「そうだな、休憩が終わる……おっと、忘れるところだった。その服が王都で流行つてゐるか聞いてくれって先輩に言われたんだけど？」

「僕以外には着てる人は見たことないですね。これ、空を飛ぶための服ですか！」

「……空を飛ぶための服!?」

カイルは理解できないのか不思議そくな顔をしている。

「もう帰るので実演しますよ。では卒業したらうちの村に就職ということでお願いしますたからね」

アルフレッドが右手を差し出すとカイルはその手を両手で掴み、握手を交わした。

「こちらこそお願いしますね」

カイルもアルフレッドも笑いながら手を離した。

「それじゃあ飛びますね。みんなにはカイル兄さんが元気だったことは伝えておきますから、怪我をしないで無事卒業してね」

「ああ、元気で頑張つていたと伝えてくれ！」

ゴウゴウと風が吹き出しアルフレッドが飛び上がった。

そして少し離れた場所に降りると、荷物を運搬するアイテムであるカーゴワインディングを持つて、ものすごいスピードで飛び去った。

「俺は夢でも見ていたのだろうか？ 訓練のしすぎで俺の頭がおかしくなつていたかな？」

頭はひどくは打つていないんだけど、何度か木剣が当たつたからな。あれが悪かつたかな？」

カイルはアルフレッドの飛び去った空を眺めながら、心の声が漏れ出ていた。

「……なんだか、どつと疲れが出てきたぞ」

「いや、カイル。お前の頭はおかしくなつていいな。俺もお前の弟が飛んでいくのを見たからな。あれは空を飛ぶための服なんだな。しかし、お前の弟はとんでもない化け物だな。あれ、相当な魔法師だぞ。空飛ぶ魔法を使えるのは絵本で見た賢者アールス・ハインド様くらいしか知らん」

カイルが声のした方を振り返ると、先輩騎士がいた。

アルフレッドが怪しそうに、先輩騎士はこつそりと隠れて様子を窺つていたのだった。

□ □ □

俺——アルフレッドは、ハイルーン村に戻ってきた。

俺たちは、飼い犬のバスを先頭にして歩いている。

バスの背中には龍の赤ちゃんのチビを抱いた、妹のサーシャが跨つている。

俺は『猫車』という愛称が定着した、一輪車の荷車を押しながら最後尾を歩く。

猫車に龍涎香と、羅針盤の試作品を積み、マシュー商会本店に向かっているんだ。

俺の服につけた腹ボケットからは、チビの双子であるベビが顔を出して外をキヨロキヨロと眺めている。

『ママ、どこに行くノ?』

念話で話しかけてくるベビ。ベビは俺をママ呼びしてくるんだよね。

ベビがワクワクしているのも、念話だと一緒に伝わってくる。まだ生まれたばかりで慣れていないから、感情も念話で一緒に送ってしまうんじゃないかな。

楽しいときはいいけど、負の感情まで送つてこられるのは嫌なんだけどね。

でも、ベビやチビが何を考えている、どんな気持ちでいるか分かるだけいいって、考えることないよね。

『お隣のマシュー商会に行くんだよ。マシューさんは大丈夫だろうけど、他の人は驚くかもしれないからおとなしくしていてね。それと、絶対に火は吹いちやだめだからね。チビ

も火はダメだよ、お店が燃えちゃうから』と、念話で伝える。

『分かったなノ』

『分かったダオ』

ベビとチビがワクワクした気持ち入りの念話を送つてくる。

『ベビ、楽しみなノ! チビも楽しみだよね?』

『楽しみ楽しみ! ねー、ベスママも楽しみダオ?』

『楽しみだよ! おとなしくしているんだよ』

チビにママ呼びされているバスは、完全に大人の対応をしている。

『みんなの念話が届くんだが、相手を絞つて念話つてできないの?』

『無理なノ』

『無理ダオ』

『この距離では無理ですね』

尋ねてみたけど、俺を念話の対象外にするのは無理らしい。距離的な何かがあるのだろう。

念話が使えないサーシャは俺たちが念話していることに気が付かない。そのまま、マシュー商会に到着した。

俺は店に足を踏み入れると、店員に声をかける。

「店主のマシューさんはいらっしゃいますか？」

「はーい。ただいま、少々お待ち……」

店の奥から若い店員が顔を覗かせたが、チビの姿に驚いたようで、くるりと反転するとそのまま奥に引き返してしまった。

すぐに店の奥からバタバタと足音がして、先ほどの若い店員と共にマシューさんが現れた。

「アルフレッド様、よく、お越しくださいました。サーシャ様まで一緒に珍しいです」

マシューさんの目が、サーシャの抱きかかるチビと、俺のお腹のポケットから顔を出すべビを交互に行き来している。

それでも平静を装ふマシューさんは流石だな。

「マシューおじちゃん、こんにはなの」

サーシャがペコリとお辞儀した。俺はちゃんと挨拶のできたサーシャの頭をいい子いい子しながら言う。

「そうですね。いつもは僕一人ですからね」

「アルフレッド様らしいお連れ様と申しましようか。サーシャ様が抱かれているのは、龍の赤ちゃんですよね？ うちの店員が驚いてちゃんと応対できず、誠に申し訳ありませんでした」

流石はマシューさん。驚かないだけではなく、不快にならないように気配りをしながらも、チビとベビをチラチラと観察し続けている。

マシューさんの後ろで隠れるようにいる若い店員はなんともすまなそうな表情のまま微動だにしない。

やつぱり龍とか苦手なんだろうか？

いや、普通は伝説の龍に出会うなんてないからな。驚くのも無理ないか。

「そうです、龍の赤ちゃんです。実は理由があつて僕がママ龍さんから預かっていて、サーシャが抱いている龍を仮ですがチビと呼んでいます。サーシャと仲よしですがベスにもベツタリなんですよ」

「それはまた貴重な体験をされているのですね。そもそも、ご用件をお伺いさせていた

だきましようかね」

マシューさんが仕事モードに切り替わった。

「国王陛下から、マシューさんに伝言を頼まれたんですよ」

「え？ 国王陛下からでござりますか？」

「はい。ポートという港町で討伐した海竜の体内から出てきた龍涎香をもらつたんですけど、国王陛下に報告したら龍涎香で香水を作るなら分けてほしい、とマシューさんに伝えるように言われたんですよ」

俺がそう言うと、マシューさんの顔が嬉しそうになる。

「国王陛下ですか？ それは光榮でござりますな」

国王陛下がマシューさんに伝えるようにと言つたことが嬉しくてたまらないみたいだ。

「しかし、海竜の龍涎香ですか。それはまた貴重なものを手に入れられましたな！ 品質と重さや大きさにもよりますが、相當に高額になるでしょうね。香水で有名なのはショーネルの五十番ですが、お聞きになられたことがありますか？」

「はい、直接は知りませんでしたが、国王陛下から聞かされました」

「流石は国王陛下ですね。では、その龍涎香を見せてくださいますか？」

「これになります」

俺は猫車に積んできた龍涎香を、マシューさんの前に置いた。

「これは……すごい大きさでござりますな。まだ熟成具合が足りていないう様にも見受けられます、上物で間違いないでしよう」

マシューさんがメチャクチャ上機嫌で褒めまくつている。

「しかし……熟成前の龍涎香を見つけたなんて聞いたことがございません。これだけの大きさになると海竜も相当の大きさだったのでしょうか。これは貴重なものでございますよ」

「これで香水が作れるんですね！」

俺が自分で作ろうかとも考えたが、自重することに決めた。

「この龍涎香の件はマシューさんに一任しますから、香水が完成したら国王陛下に献上してくださいね！」

「そう言つていただけると助かります」

変なスイッチが入つたようでマシューさんがウキウキだ。

「交渉次第ではハイルーン印の香水ブランドを立ち上げられそうです！ これはまた、楽しくなつてきましたよ！」

こうして龍涎香の引き渡しはスムーズに終わつた。

「確かに預かりました。ところで一緒に積んであるこれはなんでしょうか？ 気になつて仕方ないのですが」

マシューさんは猫車に積んである羅針盤を見つけると、あちこちから覗き込むようにして、

て見ている。

透明なガラスも使われているし、この異世界では見かけない機械的な構造をしているから気になるのだろう。

「これは羅針盤といって、船に取りつけて使うものなんですが、一定の方向を指示してくれるんですよ。場所によっては正常に動かないなどの条件があるはずなんですが、まだ試していいのでデータ不足なんですよね」

説明しながら、指で押したり揺らしたりして実演してみたが、ちゃんと羅針盤の磁針は水平を保ち、同じ方向を指示している。

「揺らしても一定の方向を示すんですか!? これはすごい! 私も触ってみてもかまいませんか?」

マシューさんが別人二十八号になつてしまつた。

龍涎香を見た時とは興奮の仕方が違います。

「いいですよ。落とすと壊れるので注意してくださいね。ガラスを叩くのも割れるからダメですよ」

「もちろんです!」

マシューさんは羅針盤を手に持つと傾けたり回したりしている。その後、少し持ち上げ

て羅針盤を下から見ていたが、大切そくに両手で抱え直した。

両手で抱えたまま、店の中をあつちに行つたりこつちに行つたりと動きまわる。

小さくジャンプしたりかがんだりしている。

きっとマシューさんは一隻の船になりきつて、荒れ狂う海を航海しているつもりなんじやないだろうか。

なんて楽しそうなんだろう、まるで子供がおもちゃで遊んでいるようだ。

おつと、マシューさんと目が合つてしまつた。照れくさそうにしている。

「これは本当にすごいものですよ。アルフレッド様が説明された通り、針が同じ方向を指示していました。船に取りつけると航海が格段に楽になりますな」

マシューさんは羅針盤を慎重に猫車に戻すと、駆け足で店の奥に入り、すぐに契約書とペンを持って戻ってきた。この契約書はいつもの、マシュー商会で^{どうせん}独占販売をする契約を結ぶためのものっぽいな。

「アルフレッド様。いつものように、ここここにサインをお願いします」

マシューさんの息が上がつていてる。

羅針盤は結構重いからな、あれだけ動きまわれば息も上がるのも分かる。

自分でやらなくても店員さんにやらせればよかつたのに、まあ、マシューさんが楽しそ

うだからいいか。

そんなことを考えながら契約書一枚にサインを捺ませた。

「書きました。さつきはマシューさんが嵐に遭った一隻の船のように見えましたよ」

俺は契約書を手渡しながら言つた。

「いやー、お恥ずかしい。アルフレッド様が言われる通り、嵐に遭遇した船になつたつもりで動きまわつてみたんです。私の演技も捨てたものではないですな。何せ、生き物ではなく船になれるのですから」

恥ずかしいのかマシューさんの顔がパツと赤みを帯びる。

「それに、この道具は売れますよ！ また儲かつしますな！」

マシューさんから熱気が伝わつてくるようだ。過労で倒れなければいいけど。サーシャも退屈しているから早めに引き上げよう。

「サーシャがいい子にしていてくれたから、好きなものを買つてあげるよ。でも高いものはダメだからね」

「わーい！ クッキーと、新しい絵本が欲しいの！」

サーシャがチビを抱いたまま、バスの背中で体を上下に大きく揺さぶる。バスがサーシャを見上げており、やめてほしがつてはいるのが手に取るように分かる。

店員から新しい絵本はないと言われ、サーシャがしゅんとなつてしまつた。

「サーシャ様！ 絵本はなかなか新しいものは作られないのですよ！ 次の絵本が発売されるといいのですが、こればかりはなんともなりませんから。私も楽しみにしているのですよ。ここはアルフレッド様にお頼みするしかありませんな！」

マシューさんが無茶ぶりしてきたぞ。

絵本は伝説を元に作られることが多いらしいけど、俺は勇者のように龍を倒してエリクサーを手に入れたりしないから、絵本は作られたりしないよ。

「マシューおじちゃんも絵本が好きなの!?」

サーシャが仲間を見つけ、元気を取り戻している。

「それはもう！ 大好きです。大魔導士様が魔法大国アスラダで岩風竜を倒す絵本が一番のお気に入りです」

ちなみに岩風竜っていうのは、恐竜みたいな竜のこと。

「サーシャも大魔導士様の絵本は好きなの！」

二人の年は離れているのに意気投合している。なんか変な方向に話が進んだら困るから、早く退散した方がよさそうだ。

「サーシャ、マシューさんは忙しいからこれ以上邪魔しちゃだめだよ。プリンを作つてあ

げるから帰ろう」

「わーい、サーシャ、プリン大好きなの！」

サーシャがそう言つて喜ぶ。

『プリンダオ』

『プリンなノ』

『プリン、あれは美味しいですね』

チビ、ベビだけでなく、バスからも嬉しい気持ち入りの念話が届いた。

俺たちは、クッキーと砂糖、大量の卵を購入するとマシュー商会を後にした。

自宅に帰るとお父様とお母様の執務室に向かつた。

国王陛下から教えてもらつた、邪神教の狂信者が聖者の一人を暗殺し、未だに犯人が捕まつていなといいう事件を報告した。

ちなみに邪神教つていうのは、邪神を崇めあがてこの世に混乱をもたらそうとしているテロ組織だ。

お母様の叔父おじさんであるマキシム・ガルトレイク第三騎士団長が捜査さがしているが、十分に注意するようにと言わたることも伝えておいた。

グラント帝国との貿易が活発に行われるようになつており、この村を出入りする人数が増え、一目で怪しい人を見分けることは難しくなつた。

何かしらの対策を講じる必要があるが、まずは、見まわりの回数を増やすなどできるところから始めるしかない。

お母様は何度も命を狙ねらわれたことがあるそうで、お父様に助けられたのだとろけられた。

それでお母様がお父様を好きになつたんだな。お父様もお母様の身を守るためとはいえ、騎士団を辞め、駆け落ち同然でこの村に移住するなんて、二人とも行動力が半端はんぱない。

この屋敷は高い壁でぐるりと囲われており、正面の出入口には門番もいる。

なので邪神教が攻撃してきても大丈夫だらうとお父様は言つているが、邪神教の狂信者が相手となるとどうなんだろうか？

以前の屋敷とは比べるまでもないほど安全にはなつたけど、絶対なんてありえないよね。だから、「邪神教の狂信者は何をするか分からぬから十分に気を付けてください」とだけ、言つておいたんだ。

さて、邪神教の話は伝えたので、ポートの港町に魚をもらいに行つてこよう。陛下やお爺様たちだけじゃなくて、家族にも新鮮な海の魚を食べてもらいたいんだ。

ということで、ウイングスースを着て飛び、港町ポートに移動。

仕事斡旋ギルドに頼んでおいた魚十キロを受け取りに行く。

いたら、お金はもらえないと言うから、マシュー商会で売ってるハイルーン印のスイーツを渡したら、「王都のスイーツがポートで食べれるなんて」と、メチャクチャ喜んでくれたんだ。買ってきてよかつたよ。

物々交換になるけど、これなら喜んで受け取ってくれるからね。

あんなに屈強な海の男たちが、甘いものには目がないんだよね。嬉しそうにスイーツを頬張る顔を見ると、なんかほっこりとしたな。

十キロの魚を頼んでいたんだけど、海竜を退治してくれたお礼だと言つて、いっぱい魚を入れてくれた。どんな魚を入れてくれたのかは、帰つて袋を開けてからのお楽しみだ。

どんな魚料理にしようかな。といつても、油で揚げるか焼くかしかできないんだけどね。ワサビはあるから刺身もいいんだけど、醤油がないんだよね。

それにアニサキスが怖いから、今回は刺身はやめておこうかな。他国を探せば、醤油や味噌はあるかもしれない。

でも大豆は確保しているから、ラノベのテンプレである醤油と味噌は、俺の手で作りた

いね。

突然だけど、アルフレッドの三時間クッキングの時間となりました。（某料理番組のように三分で調理できればいいんだけど、そんな便利な魔法はないんだよね。

本日はなかなか手に入らない新鮮な海の魚を使った料理です。先ほど、空輸されたばかりのとれたてピチピチのお魚だよ。

見た目が鯛のような魚が入つっていたので、一品目の料理は塩釜焼きに決めた。

魔法で水を作り、鯛みたいな魚を洗い、軽く鱗を取つて内臓もきれいに取り除いた。

卵白と塩を混せて、映えを狙つて魚の形に固めるよ。

後は石窯オーブンに入れて焼くだけ、上手に焼ければいいんだけど。

卵白とか作り方が違っている可能性もあるけど、大きな失敗はしないんじゃないかな。

塩は高いから、塩釜焼きはけつこう贅沢な一品になるんだよね。

前世の貧乏性が染みついていて、塩釜焼きに使つた塩は捨てられそうにない。

でも、魚のエキスが染み込んだ塩になつていいそうだよね。料理に使えるだらうか？

二品目はヒラメ？ カレイ？ みたいな平べつたい魚だ。

塩コショウして片栗粉と小麦粉をつけ、オリーブオイルで焼くよ。

舌ビラメのムニエルが有名だけど、フライパンに入りきらないから半分に切つて焼いた。

大きなヒラメ？ のムニエルが完成した。

刺身なら間違いなく美味しいはずなんだけど……ギブミー醤油！

三品目は天ぷらにしよう。キスみたいな小魚が入つていればよかつたんだけど、どれも大きな魚ばかりなんだよね。

その中にカツオっぽい魚が入つていた。炙つてたたきにしてみよう。

ポン酢醤油が欲しいな。レイモンならあるからポン酢醤油に似た調味料を作つてみるか？

カツオは傷むのが早いから、火で炙る『カツオのたたき』が考えられたとテレビの旅番組か何かで漁師さんがしゃべっているのを聞いたことがある。

麦わらに火をつけて炙つたら、カツオっぽい魚のたたき、四品目の完成だ。

ショウガとワサビとお酢とレイモンはあるからこの料理に合う調味料を作るぞ！

そう思つていろいろな割合を試してみたが……なんか違う。やっぱり醤油が恋しいな！ そうこうしてるうちに、そろそろ塙釜焼きも完成している頃だ。

マシューさんや騎士や文官のみんなも招待するつもりだから、デザートのプリンも作つておいたからね。

みんなには普通の大きさのプリンだけど、サーシャとチビ、ベビ、ベスのプリンは特別

に大きな容器で作つたんだ。きっと、喜んでくれるんじゃないかな。

そろそろ、みんなを呼びに行こうかな、『魚づくし料理』を喜んでくれるといいんだけど。

マシューさんを招待しようとお店に行つたら、以前マシューさんの護衛ごえいをしていた、ダニエルさんたちがいたんだよ。

会うのはいつぶりだろうか？

「ダニエルさん、久しぶりですね？ みなさん元気そうでよかったです！」

「アルフレッド、久しぶりだな。マシューの旦那だんなが王都に行くつて連絡があつたから護衛のために来たんだ」

「時間があるなら『魚づくし料理』を一緒に食べませんか？ いっぱい作つたので招待しますよ」

「大勢で突然の参加とか気が引けるんだが」

ダニエルさんがメンバーの顔を見ながら言った。

遠慮をするなんて予想外だな。即答で参加すると言うと思つていたんだけど、気配りのできる人たちだったんだな。

「魚づくし料理」は今朝、ポート港で水揚げされたばかりの新鮮な魚を使つてているんですけど、本当に食べなくていいんですか?」

「今朝ポート港で取れた海の魚だつて!! 是非参加させてくれ!」

ダニエルさんだけでなくメンバー全員が駆け寄つてきて、ダニエルさんからは、がつしりと両手を掴まれてしまつた。

さつきまでの反応はなんだつたんだ? きっと、海から離れているから燻製か塩漬けだと決めつけていたんだろうな。

護衛をやつていると乾燥肉が定番だから新鮮な魚なんて滅多に口にできない。

海の新鮮な魚なんて、ダニエルさんのホームタウンである王都でも食べれないから、飛

びついてくるのも分かる気がする。

そんなわけでしばらくして、ダニエルさんがマシューさんと一緒に食べに来てくれた。

当初の計画よりも人数が増えたので、裏の訓練場で食べることにしよう。

地下のシェルターも考えたんだけど、せっかくのいい天気なんだから日光浴しながら食べたいよね。

だから、今回は庭で立食形式にした。

各テーブルから少しずつ、魚料理を取りながら次のテーブルに移動してもらうことにしたんだ。学食とかでよくあるセルフバイキングみたいな感じだね。

最初に注意事項として、大量に取らないように言つておいたんだよ。兵士はみんなよく食べるから、言つておかないと均等に渡らない可能性もあるからね。

みんな立つて食べている。料理をワンプレートに取り分けるお皿を作つたんだけど、思つてはいた以上に好評なようだ。

ハイルーレン村のまとめ役である十人組のみんなはいつも手伝つてくれるんだけど、今日は騎士や文官まで料理を運ぶ手伝いをしてくれている。みんなきつぱいで助かるんだよな。

でもまあ、領主である俺が率先して働いていたら、みんなやるしかないか。

騎士はお父様を入れて五人、文官が三人、十人組を含めて兵士は三十人くらい、それに料理人や侍女たちにも参加してもらつてはいる。後は、マシューさんとダニエルさんたちが五人だな。

うちちはお父様お母様と、サーシャとベスにチビとベビが参加している。かなり人数が増えたな。

でも、魚は全員に行き渡つたみたい。

大きなヒラメみたいな魚のムニエルは、自身がプリプリで味もしつかりしていて美味しいと高評価だ。

そろそろ、塩釜焼きの塩を割ろうかな。

塩で魚の形にしたんだけど、ちゃんと映えているだろうか？

木槌で塩を碎くところが受けたると思つていてただけど、予想と違うぞ。

「あの石は食べれるんだろうか？」とか「あの石を食べるのか？」と聞こえてくる。

みんな魚の塩釜焼きは見たことないみたいだな。

みんな塩の塊が石に見えているようで興味津々なので、早速、木槌で塩を碎くことにする。

俺が木槌を持つと「石を割つて食べさせるつもりだろうか？」とか「本当に料理なのか？」とか、日々に言つてゐるのを聞こえてくる。

そう言ひながら、みんなは周りに集まってきた。

普通は魚料理で使わない木槌を持つてゐるのが不思議なんだろうな。

ボコボコ、バンバン、ドカドカ。

思った以上に頑丈だ。土魔法で固めたのがよくなかったかもしれないな。中の魚が無事か心配になってきたぞ。

あ、やつとヒビが入つた。

中の魚は大丈夫だろうか？

あっしゃ、圧縮されて潰れていないことを祈る。

木槌で碎こうとすると時間がかかりすぎるな。木槌で叩いて割つてゐるように見せて、土魔法で碎くことにしよう。無詠唱で魔法が使えてよかつたよ。

というか、火の通りが少し怪しいかも。ガチガチに固めすぎて熱の通りがよくなかったのかもしれない。

刺身で食べれそうなほど新鮮だから大丈夫だとは思うけど、魔法で加熱しておこう。お腹壊すと大変だからね。

しばらくして、いい感じに鰯みたいな魚が焼けた。取り分けよう。

ちゃんと塩味はついているかな？ 味見してみよう。

乳白色の身がプリップリで塩味もいい感じで美味しいじゃないか。

これは美味しい。白いご飯が欲しくなるな。それとやっぱりお醤油が欲しい。

前世で食べた鰯の塩焼きと変わらないレベルにある美味しさだ。

しかし、感想が聞こえてこないな。こんなに美味しいのに、俺の味覚と違うのかな？

調味料セットとか他の料理は好評だったから、そんなことはないか。

「アルフレッド様？ これはなんという料理なのでしょうか？」

マシューさんが話しかけてきた。

「知らない魚の塩釜焼きですね」

「こんな魚料理は初めて見ました。失礼なことを言いますが、石を食べさせられるのかと不安だったんですね。石ではなくて塩だったんですね。見るのも食べたのも初めてでござります」

マシューさんが嬉しそうにしている。

「ちょっとと魔法で塩を固めすぎて、砕くのが大変だつたんですよ」

マシューさんが先ほどの塩釜焼きで割つた欠片かけらを手に持ち、口に運んだ。しょっぱそう

に顔を少し�しかめる。

その大きさの塩を食べればそんな顔になるのも分かる。

「塩を魔法で固められたんですね、石というか岩にしか見えませんでしたから。木槌で割るというパフォーマンスが面白い。おもしろい。これは絶対に受けますよ」

「魚は美味しかつたですか？」

「美味しいの一言です。味つけは塩だけなのですよね？ 信じられないほど身がプリプリしてて、なんといつても塩味が抜群にいい。魚の旨味うみみが閉じ込められている。それに岩を木槌で砕く斬新な演出も面白い。国王様にもお見せになつたのでしょうか？」

マシューさんがべた褒めだ。

「今日初めて作つたので、ここにいるみんなが初めて食べたになりますね」

「なんと！ 私たちが初めてですか？ これは自慢してしまいそうです。でも国王様に話すと拗ねうねられそうだから、ポロツと言わないよう気を付けないといけませんね」

「マシューさん！ 国王陛下に会われても絶対に黙つておいてくださいよ」

「そうしましよう。お互いのために黙つておくのがいいですね」

俺とマシューさんはがつりりと握手を交わした。

天あまぶらは塩釜焼きで使つた塩の塊を砕いて、塩をつけて食べてもらう。塩は高価だから捨てるのもつたないからね。苦手な人はお好みで調味料セットを使つてもらうように説明したが、みんな、塩で食べている。口に合つたようで安心した。

兵士やダニエルさんたちが何やら怪しい行動をし始めた。

あれ？ バラバラになつた塩の塊を布に包んで懷に収めているじゃないか。

塩は貴重だし、魚の味がついているから携行用の調味料にちょうどいいんだろうな。

天ぶらも美味しい。骨はちゃんと取り除いており、魚ステイックみたいな形状にしている。

自画自贅だけど火加減も絶妙で美味しい。この微妙な焦げ具合もいいアクセントになっている。

レイモンを搾ってみるか。ナイフでレイモンをカットしてギュッと！

痛！目に飛んできた。なかなかこのレイモンは生きがいいやつだ。

これも美味しいぞ！塩窯焼きの鯛みたいなやつにも、搾ってみればいいんじゃないかな。

天ぷらでお腹が膨ってきた。俺的には今回の魚料理は満足の行く出来栄えになつていても、なんといつても魚が新鮮だったからだけね。きっと誰が料理しても美味しいからなんじゃないかな。

「魚の天ぷら、早い者勝ちだよ！」

待つていましたと言わんばかりに、兵士とダニエルたちが走つてきて、すぐに売り切れになつてしまつた。

サーシャがプリンを見つけたようで、みんなにデザートはプリンがあると言つてまわつたみたいだ。

みんな、プリンを食べる気満々な様子で、『プリン』『プリン』と話し声が聞こえてくる。今になつてダニエルさんたち分のプリンが二つ足りないことに気が付いた。もつと余分

に作つておくんだつたな。

二人だけ食べれないとか揉めごとになりそうだからな。サーシャたちのジャンボプリンから二人分を捻出するか……

念話でチビとベビとベスにジャンボプリンから取つていいか聞いたら、あからさまに不機嫌な気持ちが伝わってきた。

誰も分けてくれそうにないな。サーシャは一番のプリン好きだし。もし、分けてくれたとしても機嫌を損ねそうだ。

これはジャンボプリンから取るなんて選択肢は存在していない。俺のプリンを渡すとして、あと一個どうするかな？お母様に明日二つ渡すからという提案をして頼んでみよう。結果はぱつちり、お母様は二つ返事でOKしてくれた。

これでダニエルさんたちにも食べてもらえるな。

お母様は「私は食べなくていいですよ」と言つてくれるかなとかすかな期待をしていてんだけど、「明日、プリン二つね」とニッコリと微笑みながら言われてしまつたよ。結局要求してくるんだな。

あちこちからプリンが美味しいと感想が聞こえてくる。みんな、甘いデザートは好きなんだな。

あと、カラメルの売れ行きがいい。
苦いのが苦手な人がいたらと思って自由にかけるようにしたんだけど、みんな、かけて食べている。

なんか列ができ始めたが、ダニエルさん、何回目を並んでいるんですか？
というか器にプリンが入っていないんだけど。

カラメルだけを食べますよね。

そうですか、この苦甘いのが美味しいですか。そんなに喜んでもらえるなんて誘つてよ
かつたです。

あれ、サー・シャの姿が見えないな？

『ベス？ サー・シャはどこにいるの？』と、念話で聞いてみる。

『テーブルの近くにいますよ』

おかしいな、見えないんだけど……

少し姿勢を低くしてみたら、テーブルの下に隠れるようにしているサー・シャを見つけた。

「サー・シャ、プリンは美味しい？」

手に持っているジャンボプリンは手つかずのままだった。なんで食べていないんだ
ろう？



立ち読みサンプル はここまで

「アルお兄様のプリンがないから、サーシャのプリンを少し分けてあげるのです
え!? プリン大好きサーシャがプリンを分けてくれるなんて、マイエンジェルはなんて
嬉しいことを言つてくれるんだ!

「サーシャ、ありがとう!」

サーシャが器にプリンの半分を取り分けてくれた。俺はスプーンでプリンを口に運ぶ。
そんな悲しそうな目でプリンを見つめられるとお兄ちゃん、ぶるんぶるんのプリンが喉^{のど}
に詰まりそうなんだけ。

視線が痛いし、悲しそうに見つめるサーシャに耐えないので、半分返そう。

「サーシャ、プリンを戻そうか?」

「戻してくれるの?」

サーシャが嬉しそうに言う。

もはつた半分を戻したが、まだ、悲しそうな目で見つめてくる。

分かつたよ、残りを全部返すからその悲しそうな表情をやめて笑つてくれよ。
というかサーシャ、よく俺にプリンを分ける気になつたな。

結局、一口食べただけで、ほとんどサーシャの元に、プリンは戻つていった。
それでも嬉しい。なんたつてプリン大好き幼女のサーシャが自分のプリンを分けてくれ

たんだからね。

『チビちゃん、ベビちゃん、ベス、あなたたちはちゃんと食べたかな?』と、念話でチビ、
ベビ、ベスに尋ねる。

『ちゃんと食べたダオ。魚もプリンも大好きダオ』

『お魚もプリンも美味しかったノ』

『アルフレッド様が作られる料理はどれも美味しいですよ』

『喜んでもらえて作つた甲斐^{かい}があつたよ。また作つてあげるからね』
チビ、ベビ、ベスがよほど嬉しかったのか、俺の足にじやれついてきた。

こうして、食事会が終わった。

「新鮮な魚料理は美味しかった」と口々にお礼の言葉をもらうことができた。俺はこの一
言が聞きたいためにやつてているのかもしれないな。

後片付けは参加者が手伝つてくれたので、短時間で終わらせることができた。

普通なら食器洗いが一番大変なんだけど、俺の場合は土魔法で穴を掘り、食器を投げ込
んで元の土に戻し、ブルースライムに浄化^{じょうか}を手伝つてもらつたら終わりだからね。
後はテーブルと椅子を同じように土に戻してお開きだよ。